

1. 教育の責任

大手前大学の「生涯にわたる、人生のための学び」という建学の精神に基づき、「自ら学ぶ力」「他者と協働する力」「豊かな人間性と自己肯定感」を養う教育の実践を目指している。

「学びの道しるべA・B」（春・秋学期、各2単位、20名）

「ゼミナールⅠ・Ⅱ」（春・秋学期、各2単位、17名）

「卒業研究」（通年、4単位、13名）

「日本文学入門」（教職課程必修科目〈中高国語〉、春学期、2単位、205名）

「世界の中の日本文学」（春学期、2単位、47名）

「日本文学演習」（春学期、2単位、26名）

「日本の名作を読む」（教職課程必修科目〈中高国語〉、秋学期、2単位、196名）

「日本人の心とことば」（秋学期、2単位、56名）

「日本文学研究」（秋学期、2単位、68名）

「日本文化・阪神文化」（春学期・秋学期、オムニバス授業、2単位、春158名・秋168名）

「博物館実習」（博物館課程必修科目、通年、3単位、7名）

「日本近代文学特殊研究」（大学院科目、秋学期、2単位、4名）

「比較文化特別研究Ⅱ」（大学院科目、修士課程研究指導、通年、4単位、1名）

2. 教育の理念

過去の文物を通して、変化する現代社会を生きる人間力を養うことを目標としている。昨今「古典文学は必要か？」という問いをしばしば耳にするが、時代も言葉も異なる文学や歴史資料という過去の文物を、作者の生きた時代や社会状況などの背景も含めて理解しようと努め、学び得たことを言語化し、共有する行為は、まさに、国際社会を生きる上で必要な「他者理解力」と「自己表現力」を養うことに他ならない。対象を正しく理解するための基礎知識を身につけ、多様な価値観が存在することを知り、学び得たことを言語化して他者と共有する一連の学修プロセスのなかで、学生自身が気づきや喜びを得ることができる授業を目指したい。

3. 教育の方法

日本文学系の授業では、主に古典から近現代文学を取り扱う。学生の多くは、古典文学に対し、中高での単語・文法の暗記教育による苦手意識を持っている。また、近現代文学であっても、文学における言語表現は、読書経験の少ない学生にとって、馴染みの薄いもの・難しいものと認識されがちである。現代作家による現代語訳や、漫画・アニメ化された作品、映像等も活用し、まずは内容の面白さを味わってもらえるよう工夫している。また、中高の教科書で学んだ作品を、改めて深く読解することで、学生自身が大学でのより専門的な学びを実感することを目指している。作品読解において、鍵となる部分は原文そのものの表現の分析を行い、文学作品にアプローチするための基礎的な方法を提示する。合わせて、自らの意思・思考を正確に言語化する力を養うことも目指している。授業内には、文学作品を通して自己のあり方を内省する契機となる問いかけを積極的に行い、過去を通して現代を学ぶことを学生自身が実感できるよう心がけている。毎回、数人の学生のコメントを「フィードバック」として紹介し、様々な考えがあることを知り、自己認識を深める機会としている。

博物館実習の授業は、実技実習・見学実習・館園実習の三つが主となる。デジタル技術の進歩により、博物館をめぐる状況も目まぐるしく変化している。時々刻々の変化にも対応できるよう、オンライン展示等新しいトピックも取り上げ、実践的な学修を心がけている。掛軸・巻子・屏風・陶磁器等、実物資料を用いた実技実習では、個別指導を行い、受講者全員が確実に技能を習得できるよう努めている。また、学芸員の仕事は、展覧会開催に伴う事務や広報物のデザイン、関連講座でのレクチャー等、多岐にわたる。授業では学芸員としての礼儀・コミュニケーション力の養成を図るため、企画プレゼンテーションを始めとする各種発表・討議や、学生主体による企画展の開催を行い、社会人として通用する力を身につけることができるよう、指導を心がけている。

4. 教育の成果

講義系科目では、授業をきっかけとして学生の興味・関心の幅が広がり、授業で紹介した本を自主的に読んだ、関連する展覧会を観覧した、といった報告を受けている。

演習系科目は、とりわけ学生自身が達成感を感じる度合いが高い。指導する側から見ても、各分野の実践的な方法・技術を習得し、学生が成長していることを感じる。博物館実習では7名全員が学芸員資格を取得することができた。

5. 改善への努力と今後の目標

今年度の「日本文学演習」では、取り扱うテキストを昨年度の『百人一首』から『仁勢物語』に変更した。近年、国語科教員志望の学生が増加していることを踏まえての変更である。和歌のみの『百人一首』から、文章と狂歌を扱う『仁勢物語』に変更することで、一層の、基礎力・読解力の向上を狙った。『仁勢物語』は平安時代の『伊勢物語』を踏まえたパロディ作品であるため、おのずと、教科書で取り扱われることの多い『伊勢物語』にも触れることになる。授業は演習形式で行い、発表者は、各自の担当範囲について、「語釈」「現代語訳」「典拠との比較」「挿絵の比較」について調査分析を行った成果をレジュメにまとめた上で発表し、その後の質疑を経て考察を練り上げた。作品読解と研究における一連のステップを経験することは、教員志望の学生、またそうでない学生にとっても、大切な学びの経験になるだろう。テキストの難易度を上げ、文章を取り扱ったことにより、学生の古文力がいかほどであるのかを把握することができた。発表の折々に、教員が補足説明を行ったが、文法や敬語の考え方、主語の取り方、といった基本的な事柄をしっかりと身につける機会が必要であると実感した。次年度以降、古典科目（講読→演習→研究）全体の構成内容に反映させていきたい。

一方で、『伊勢物語』と『仁勢物語』の比較考察においては（特に挿絵について）、学生の柔軟な発想によって、さまざまな意見が出された。なかには「なるほど」と唸るものもあり、そのことが他の学生の刺激となって、積極的に楽しんで考察を行っていた様子が見えた。一つ一つ辞書を引いて言葉の意味を調べ、文法を確認する作業は、堅苦しい、難しいことかもしれないが、それでも「作品を読むのは楽しい」という思いを持ってもらうことができたのではないかと思う。今後は、さらに「くずし字」の解説も取り入れ、授業内容を充実させていきたい。

【添付資料】

各科目のシラバス